

NEWSLETTER

## 生態人類学会ニュースレター

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

1999年1月15日発行

## 報 告

「適寿」という用語：  
適寿 (appropriate age) 論

近藤 功行

(川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科)

## 【緒言】

現在わが国における長寿科学研究では、遺伝子・栄養学・臨床医学・ライフスタイルなど様々な側面からの調査研究がなされている。筆者は、これらの長寿科学研究のなかでも、社会・文化的要因の解明に取り組み、琉球文化圏の高齢女性の徘徊行動に関する研究や、与論島(鹿児島県大島郡与論町)での死生観に関する調査研究などを行ってきた。そして、これらの調査研究を通して、長寿要因の解明に加えて、長寿科学領域における新たな概念・用語の提唱が必要であると考えた。それが、演者が打ち出す用語：『適寿(Appropriate age)』である。この用語を提唱するにあたり、ここではこの用語の提唱に至った背景や長寿科学研究における位置づけについて述べ、『適寿』に対するイメージを学生に調査した結果などを加えて、本用語について考察してみたい。

## 【研究背景】

1) 沖縄地域における長寿要因の解明に関する研究：現在、沖縄地域における長寿要因の解明に関する研究には以下のようなものがある。(1) 戸籍などを含む保健統計学的データの信頼性の検討。(2) 温暖な気候が呼吸器系・循環器系に及ぼす効果と紫外線の影響。(3) 他地域に比べて、特異な食文化・食習慣。沖縄地域では、ブタのほとんどの部分を食しており豚肉の消費量は日本一である。また、沖縄県は脳卒中・心臓病が全国最下位で、このコラゲンの摂取が血管壁を強化し、脳卒中の発症率を引き

下げていると考えられている。ブタの他にも、沖縄県には脳卒中や心臓病の発症を抑制するような食習慣があり、これらに関する研究が行われている。以下に、その食習慣を簡単に紹介する。ソキ(豚の骨つき胸肉)や足テイピチ(豚足)などの豚料理、山羊肉の摂取、黒砂糖の使用、昆布、モズクの摂取、サツマイモ、ゴヤー、緑黄色野菜(ヨモギ・ニガナ・ウイキョウ・サクナなど)の摂取、少ない塩分摂取量、チャンプル料理、豆腐の摂取、食習慣に加え、硬質の水。(4) 労働(運動)と休息の関連性、この地域では、サトウキビ栽培を伝統とした農作業を行っている。この作業が心肺機能を高め、長寿につながっているのではないかと考えられている。長寿をぐる健康調査からは、食事・睡眠・運動の影響が大きいことが明らかになっており、大宜味村での健康調査でも、高齢者は農作業など汗をかく労作を行うと同時に適度な午睡による休息、労作後のシャワー・浴の習慣がみられた。(5) 精神的健康に関する研究。沖縄には、ユイマールと呼ばれる相互扶助精神の強いシマ社会とそこに繰り広げられる共同体社会がある。また、「くよくよ思い悩むな。もっと気楽に考えなさい。」という「テゲ主義」と呼ばれるである県民気質が存在している。そして、自分の生まれ育った土地(家)や沖縄(ウチナ)へのこだわりがある。また、高齢者にも役割が期待されており、“老い”とは無縁な現役での仕事ぶりがみられる。隠居制度がないのが沖縄社会(琉球文化)の特徴であり、ここに高齢者が尊重され、必要とされる地域性が存在している。(6) 公衆衛生に関する研究。この地域では、介輔制度(医介輔・歯科介輔)が存続し、本土復帰前のアメリカの保険医療行政による離島・僻地でのプライマリ・ケアが充実している。

なかでも、演者は、以下のような内容に力点をお

いて継続した取り組みを進めてきた。

(1) 沖縄地域における長寿要因の検討をはかる厚生科学研究(厚生省長寿科学研究事業)の研究グループでの分担研究[研究代表者:琉球大学医学部 崎原盛造教授] (2) 沖縄本島並びに周辺離島および奄美諸島全域の特別養護老人ホーム(奄美諸島では養護老人ホームなども含む)をまわって高齢女性の一過性の徘徊行動の存在を調査した結果、1997年現在でも旧暦1日・15日頃になるとこの行動を呈する高齢女性の存在が確認された。この証左は、祭祀儀礼を担う女性が「火(台所)の神様」に向かって一家の無事や家族の繁栄を祈る人生のなかで続けてきた行為がある時期に断たれておこる葛藤の現れであった。長い間の期間をかけて体得してきたものが、特別養護老人ホーム入園という出来事でもって崩れることから不共和音の表出と推測される。これらの調査研究を通して、我々は長寿要因の中でも、(1)健康に及ぼす気候の影響、(2)社会関係と長寿の関連性、(3)精神的健康度について、取り組んできた。(3) QOLの側面。演者はこれまでQOLの研究を通して生と死の側面を見据えてきた。QOLは定着した用語であるが、QOLのLすなわち「Life」には多岐にわたる意味があり、翻訳次第では2つのグループに分かれると演者はとらえている。つまり、QOLとは《生活の質》と《生命の質》の両者である。《生活の質》の方は、「今があって無限の将来を考えたと、現在の質をいかにあげるか。先が無限にあるから、自分や他人の命は把握できない。今の生活や今を大切にしよう。」という側面が強い。ここで述べた「無限の将来」とは、「人間はいつ死ぬかということが決められていないから無限に生きて行ける」という想定で述べた内容である。一方、《生命の質》の方は、「命には限りがあり、そして終わりがある。終わりまでをいかに充実させるかということは、充実した過去を積み上げていくこと。現在を充実させるのではなく、過去を評価していかに過去が充実しているかを知ること」という側面が強い。今いる自分がいて、昔の自分自身について思いだした出来事が過去であり、それについて充実していたか、満足できているかということである。それを自分で確かめることができれば、これから先のことに対しても安心して生きていける。このように、人間の一生をみていく時にこのQOLという用語の持つ意味合いは大切な内容をはらんでいるのではないと思われる。QOLについての理解は、長寿科学研究でも重要である。(4)長寿科学研究における新たな概念 長寿科学研究は、既に研究者の間では「長寿研究自

体は頭うちになるのではないかと」もささやかれている。「高齢者人口が増加するなかで、少ない若者がこれからの社会を支えて行かねばならない」ということは一般の常識になっている。口や鼻、腹部やお尻に管を通され、口さえも利けないまま終末を迎えることになる医療行為の状態を俗に《スパゲッティ症候群》と言うが、このような医療行為により増大する医療費は現在の問題でもある。老人医療費が財政を圧迫する中で、痴呆性老人の数は今後ますます増大することが予想される。今までの充実した人生が痴呆症になることによって、すべてを無に帰してしまう。このようなことになれば、今後は単なる《長寿》ではなく、新たに生きることの意義を考究していかなければならない必要の迫られた時代になっていると言えるのではなからうか。尊厳をもって死ぬことの必要性がうたわれはじめている現在の《長寿》は、言いかえれば「いかに生かすか」という点にある。そもそも長寿科学研究そのものは、「いかに長く生きるか」「何故、長く生きて来たのか」という視点が強かった。人間には寿命がある。「ほど良く生きて、ほど良く死ぬ」ことが望ましい。では、このようなことを問えるような、新たな概念規定(用語)は用意できないのであろうか。演者は、ここで1つの用語を構築していきたいと思う。

#### 【『適寿』という用語について】

演者の用意した語は、『適寿』。この《適寿》を英語で、“appropriate age”と表記した。「appropriate」には、「適切な、ふさわしい」といった意味がある。精神的活動と身体的活動が停止する時期が一致していることもこの意にかなっているかもしれない。「『適寿』がどのようにして保たれているか」など、この視点からのアプローチが出来れば、今後の学問にも寄与して来るのではなからうか。これは、先に述べた(4)につながる。

#### 【『適寿』とQOLの側面について】

QOLのより良いレベルで生きることは大切である。「QOLの高いレベルで生きるということ」「QOLの高い生活、満足のゆく人生を送り安らかに死ぬこと」「長命と短命に関わらず自分にあったQOLで生活し生命を終えること」。この「よく生きる」という限界が『適寿』と言えはしないだろうか。QOLを数量(計量)化する試みはすでに多方面で進められているが、これを明確にすること自体は宗教的立場からはさらに認められにくいのではなからうか。

QOLを保つということの延長に延命治療があると

すれば、この QOL を無視して寿命を長らえるということはどう考えればよいのか。今後、このような視点を解決する上では地域調査から何らかの回答が得られるかもしれない。例えば、演者の調査研究の対象地である与論島での死のあり方は、見方を変えれば、表現は粗いが「最後まで生きている」ということになる。反面、見方を変えれば体じゅうに管を通され口も聞けないような「スパゲッティ症候群」にならないようにして自宅で死を迎えているという地域性は『伝統的適寿』となっているとも言える。前者の言い方では『適寿』が活かされていない(QOL が保てない)ということであるかもしれない。ただ、この場合どちらを選べばよいのであろうか。

#### 【まとめ】

今日の長寿科学研究そのものは、『適寿』を考える視座をはらんでいると思う。演者が断続的な琉球文化圏での長寿科学研究に関わる機会を得たなかで、演者は現在の《長寿》研究の延長線上の視座を模索している。与論島における調査が 10 年目を経過した演者にとって、長寿要因の解明とは異なるこの『適寿』の視点が新たな課題である。自宅で死を迎えている人がほとんどという自治体(1 島 1 町)であることを立証できた与論島において、さらに『適寿』の視点を打ち出すだけの材料があるのだろうか。「自宅で死を迎える」と論島の人がこの『適寿』の側面に関してどう思っているのか。「スパゲッティ症候群になることを嫌うことを与論島では何と表現しているのか。「自宅で死を迎えることを与論島では何というのか(与論島のことばで)。「畳の上で死を迎える」と言っているが、そもそも与論島に昔は畳はない。その時に何と言っていたのか。『適寿』に相当する概念が、価値のある生活習慣がいきづいている与論島には存在したのではないか。それを探ることがどこまで可能か。現在、多角的な検討を行っている。そもそも、『適寿』という用語を確立する意図は、人生の価値追求に向けてその意義を模索することでもある。同様な研究の側面をみると、海外においては、Rowe JW と Kahn RL(1997)が提唱している「Successful Aging」がある。国内では鈴木信の研究に加え、秋坂真史の研究成果が大きい。

《長寿》《量寿》《質寿》『適寿』といった人生の価値追求に向けての用語を用意することは、今後の社会性を位置づける上でも不可欠ではなからうか。

《健寿》という言い方も紹介できる。今後、演者の提唱する『適寿』ということばが定着できるかどうかはわからない。演者なりのまとめをしておけば、『適

寿』とは、「(高齢者を)支えるシステムが個人に集中せず、高齢者を介護する人々の QOL についても考える必要がある。」と、締めくくることが可能である。最後に、本研究を『適寿 (appropriate age) 論』としてまとめてみる。

Life との関わりの中で寿命を考えるということで、生命としての寿命、生存としての寿命、生活としての寿命などの問題が、一括して Quality of Life に集約されてきたのが、ここ数十年の経緯であろう。その中で、『適寿』と世間の認知を得るには、自分自身の生活の中で満足がいくという人生の区切り、あるいは一歩(歩幅は相当大きい)進んで、自分自身が生活している環境の中で、他者を通して自分が満足できる人生の区切り、といった理解が得られることが問われるであろう。前述した《天寿》を全うしたという理解は、自分の満足とは違うところでの他者の理解に他ならない。《天寿》は《長寿》であったことは事実であろうが、決して、長生きしたから《長寿》を全うしたとは言えないことは明かである。このように考えて行くと、自分の使命は終わったとして人生に区切りをつける行為に対する論点、あの人の人生は終わったとして区切りをつけさせる行為への論点、の 2 つは人間行動と人生観の関わりをもつものであり、これを普遍化すると文化論争に発展するであろう。それゆえ、われわれ基礎的な学問を担うものにとっては、観察・収集できる資料を蓄積することが問われるのである。

付記：本研究内容は、平成 8 年度厚生省厚生科学研究(長寿科学研究事業) 崎原盛造研究班(崎原盛造琉球大学医学部教授)の分担研究を土台としたこれまでの基盤研究を進展させ、将来の長寿科学研究を模索する視点を加味して執筆したものである。学生教育の中で、QOL 教育を進展させ長寿科学研究を述べることは可能であろう。

## シリア北東部ジャジ - ラにおける薪採取観光と植生変化

古賀 直樹  
(九州大学)

### 1. ジャジ - ラの歴史的背景

ジャジ - ラは 1950 年代以降、農業機械による大規模かつ急速な耕作地拡大の結果、草原面積がおおき

く縮小しアラブ系牧畜民の定住化がすすんだ。半乾燥地に位置するジャジ - ラの平原部は現在シリアの穀倉であり、農業生産（ムギ・ワタ）の中核的役割をになっている。草原の消失は当該地域において牧畜民が従来おこなってきた遊牧様式を大幅に変更することになった。すなわちテントによる広領域の長距離移動から定住村を拠点としたより狭い領域内での短距離移動をおこなう利用方式へと移行した。アブドアジズ山地（以下、JAA）は今日、ジャジ - ラにおいて耕作化されずに残された草原山地として春季の移牧テントをひきつけている。さらに JAA の優占植生である shrub 類は薪資源としても重要な意義をもっている。

#### ・パン焼き文化と薪採取

ジャジ - ラの農村部での薪の用途は、過去において、日常の調理、冬季の暖房および洗濯など生活の多岐にわたっていたが、ガスコンロおよび石油ストーブの普及にともない、現在ではパン焼きの燃料としての利用にほぼ限定されるようになった。地域におけるパン焼き文化の存在が薪の使用を今日まで継続させてきているという見方も成り立つであろう。パンはサ - ジとタンノ - ル 2 種類が交互に毎日家庭で焼かれる。パン焼き燃料の薪として平原部ではワタのつみ取り残さが利用されるのに対して、JAA においては家畜（ヒツジヤギ）のふんのほか shrub の採取がおこなわれている。shrub 採取は女性の労働としておこなわれ、家庭消費の 1 年分が、雨季である冬季から春季にかけて集中的に掘りおこなわれ家によこに積みおかれる。shrub のなかでは、木質化したかたいトゲをもつアカザ科のスル（*Noaea mucronata*）およびヨモギ属のシ - ヒ（*Artemisia herba-alba* Asso）のふたつが有用であるが、スルのほうが燃料としてより価値がたかいとされる。

#### ・放牧資源としてみたアブドアジズ山地と季節的移牧

放牧パターンを周年的にみると JAA は主として春季に利用される。夏季はムギの刈りあと地、秋季はワタのつみ取りあと地がそれぞれ放牧利用され、冬季は給餌飼料に依存した利用パターンである。

JAA から遠隔地に定住した牧畜民はヒツジ・ヤギの飼養頭数が減少したものがおおく生計のなかで牧畜のしめる割合はひくくなっている。したがって JAA

への移牧は飼養頭数の比較のおおい近隣の定住村からのものがその中心をしめている。移牧は家族単位でおこなわれるが部族ないし氏族によって放牧される場所が、きわめてゆるやかにではあるが、特定されており部族ないし氏族単位での同じ定住村からのテントが同一の放牧地にはられる傾向にある。

JAA における春季の放牧資源として、第一義的には、草本類が重要であり、牧畜民が移牧場所を選定する主要因とみなされるが、shrub であるシ - ヒも芽生えの時季（2-3 月）はヒツジ・ヤギの嗜好性がたかく、よく採食される。

#### ・草原植生の分化とその民族生態学的意義について

牧畜民による JAA の草原利用は放牧のほか薪採取利用があわせておこなわれ、草原の人為的な植生変化を検討する場合、とくに、このふたつの利用の側面から複合的に考察をおこなう必要がある。JAA の草原植生は大きく 4 つの植生型に分化している。すなわち (a) dwarf-Artemisia 型、(b) Noaea 型、(c) 中間 [(a) と (b)] 型、(d) 草本型の 4 つの型が認められ、a) - c) が shrub 優占型の草原である。簡略化して述べると、人為的な利用圧 - この場合、薪採取圧ないし放牧圧 - がくわわるにつれ、shrub 優占草本 裸地という順番で植生は退行するが、shrub と草本の優占度には降水量も関与しているとみられる。shrub 型草原が分化して dwarf-Artemisia 型になるか Noaea 型になるかは、薪採取圧および放牧圧のふたつの人為的利用圧の相対的な強さが関係しているとおもわれる。この関係をしめすとつぎのようになる。

薪採取圧 > 放牧圧 dwarf-Artemisia 型  
放牧圧 < 薪採取圧 Noaea 型

地理的・空間的配置からみれば、定住村に近接した場所に dwarf-Artemisia 型がみられ、Noaea 型はさらにはなれた場所に認められる。こうした JAA の草原の植生変化は、1950 年代以降定住化の過程にある牧畜民の多面的な環境利用の積み重なりの中で形成されてきたものとかんがえられる。

シ - ヒは、放牧、薪利用双方において重要な資源であるが、dwarf-Artemisia 型草原として定住村ちかくでのこされている。このことは、競合するふたつの用途のなかで、シ - ヒの薪としての採取が回避され、草本類が発芽しないか、発芽しても死滅する干ばつ年の救荒的な放牧資源として dwarf-Artemisia 型草原のシ - ヒが牧畜民により保全されていると推定される。

## 狩猟採集民サンにおける養育行動

高田 明

(京都大学大学院人間・環境学研究科  
アフリカ地域研究専攻)

### 1. 問題

南部アフリカ一帯に分布する狩猟採集民サンの養育行動については、1) 母親が長期間にわたり乳幼児に密着して授乳・養育を行なう、2) 乳児に対して歩行訓練が行われる、3) 乳幼児と年長児の関係は希薄である、といった報告が行われてきた。しかし、こうした報告は限られた観点からの行動観察や大まかな記述に基づくもので、近年飛躍的に発展をとげた比較行動学や心理学の観点をとれば、まだ十分に検討されていない側面も多い。こうした観点からサンの養育行動の特徴を明らかにするとともにそうした養育行動が乳幼児の発達や社会環境とどう関連しているかを検討することが必要である。

このような問題意識から、ボツワナ共和国のカラハリ砂漠、ニューカデ地区に住むサン ( | Gui および Gana ) のもとでフィールドワークを行なった。

### 2. サンにおける養育行動

#### a. 授乳

サンの授乳は、日本人や欧米人と比べると持続時間は短い、より頻繁に行なわれる。授乳の持続時間が短いのは、母親が授乳中の乳児にほとんど働きかけないためだと考えられる。特に、これまで遺伝的に支配された行動だといわれてきたジグリング ( 吸啜の休止期間に乳児をやさしく静かに揺する行為 ) があまりみられないことは注目される。また、母親は授乳のために特に決まった時間や場所を定めることはなく、乳児がむずかるとその場で授乳をはじめ、授乳が定期的な間隔を置いて行なわれないのはこのためである。さらに、次子ができないかぎり離乳は行われない。つまり、サンの授乳場面では、乳児に能動的に働きかけ、発達を方向づける行動がみられない。

#### b. 語りかけ

サンでは、母親が乳幼児に語りかける頻度が少ない。母親が乳児に語りかけるのは、たいてい乳児がむずかった場合である。幼児に語りかけるのは、たいてい何かを禁止したり注意をうながすためである。

また、一般に母親が乳幼児に語りかける時には、声の調子を高くあげ、抑揚を誇張し、発話時間は短

かくなるといった傾向があるといわれている。こうした特徴をもった語りかけはどんな文化でも普遍的にみられると主張されており、マザリーズと呼ばれている。しかしサンでは、母親が通常乳幼児に語りかける場合の声の調子や抑揚は、普段とそれほど変わらない。したがって、マザリーズが普遍的にみられるという主張は再検討される必要がある。

声の調子が高かったり抑揚を誇張された音声は乳児を聴覚的にひきつけることが分かっている。マザリーズは、まだ言語理解が十分でない乳幼児に言葉を教えるためこうした特徴を利用していると考えられる。しかし、サンでは、そうした言語発達を促進させようとする能動的な働きかけがみられない。

#### c. 歩行訓練

サンは、乳児に対しては早い時期から頻繁に歩行訓練 ( 乳児の両脇に腕を入れ、抱え上げて直立姿勢を保持させたり上下運動をさせる一連の行為 ) を行なう。大人は歩行訓練が歩く力を育てると考えている。母親は、乳児が泣声を出したり、体を大きく動かした後に歩行訓練を行なう。この場合、乳児はたいてい泣きやみ、快適な状態にあることを示すクウィングという声を多く発する。これらから母親は乳児をあやす効果をねらって歩行訓練を行なうといえる。これに対して、訪問客は乳児の機嫌がよい時にも歩行訓練を多く行なう。これは訪問客がその場にいつづけるための理由づけに歩行訓練を行っているからだと考えられる。

歩行訓練は、乳児の歩行行動を引き出し、歩行に関連する発達を早めることが分かっている。サンでは、歩行を促進させようとする能動的な働きかけがみられる。日本で乳児が自発的に歩行を開始するのをまつのとは対照的である。

#### d. 子守り

サンの中の!Kung では、年長児が乳幼児の世話をしないとされていた。しかし、今回調査対象とした | Gui、Gana では3歳から15歳までの広い年齢層で年長児が乳幼児の世話をする例が多く確認された。これはサンの中でも | Gui、Gana だけがそうしてきたのか、あるいは近年の社会環境の変化にともなって生じたものなのかを見極める必要がある。

### 3. まとめ

サンでは、授乳、語りかけに関して発達を方向づけようとする能動的な働きかけがみられない。また、排泄の訓練を行なわないことも知られている。しか

し、歩行に関しては能動的に働きかけている。こうした特徴は、乳幼児の発達に大きく関連していると考えられる。これらは欧米を標準として養育行動や乳幼児の発達の普遍性を論じてきたこれまでの議論に再考をうながす。サンはカラハリ砂漠という厳しい自然環境で狩猟採集を生業として独自の社会環境をつくりあげてきた。彼らの養育行動の特徴は、こうした社会環境と結びついていると考えられる。

## トウモロコシにたどりつくまでに - 岩木山麓の開拓集落

金子 守恵  
(弘前大学人文学部)

青森県津軽地方地方南部の岩木山麓に位置する岩木町常盤野地区は、「嶽キミ」よばれるトウモロコシの産地として有名である。嶽キミを栽培しているのは常盤野地区を構成する6つの集落のうち、端穂、枯木平、嶽農場の3つで、そのいずれもが開拓集落である。私はこの3つの開拓集落を対象として、嶽キミの産地形成の過程について調査を進めた結果、次のような興味深い事実が明らかになった。1)産地形成の過程において、トウモロコシは行政主導ではなく、個々の農家の試行錯誤の中から選ばとられた。2)トウモロコシ栽培の拡大は、既存の社会関係や社会組織に基づいた合意形成によって計画的にすすめられたわけではなく、この地域で安定した栽培ができかつ市場価格の高い作物を模索した個々の農家の動きが同調した結果である。3)販路の開拓と拡大は、個々の農家が個別に行った試行錯誤の蓄積と集落を越えた農家間の連携によって可能になった。

嶽キミの産地形成が行われた結果、現在では一世帯が一シ・ズンに1500万円もの収入を得られるほどになっている。しかしそれは安定した生活の糧を得られるようになったというだけでなく、嶽キミがこの地域に住んで農業で生計を立てるというライフスタイルを肯定し、この地域に暮らす誇りをあらわすシンボルとなったからこそ重要なのである。それは同時に無縁故開拓集落の人々がこの地に根をおろして住民となる過程でもあった。この発表では、トウモロコシ栽培の創始者である瑞穂集落を中心に嶽キミの産地化の過程を追うことで、開拓集落の人々がどのようにしてこの地域に定着してきたかを明ら

かにする。さらにその事例を通して、現代日本の農村におけるシンボルの意味について論じたい。

嶽キミを栽培している3つの開拓集落のうち、枯木平と嶽農場が地元津軽の出身者によって構成されているのに対して、瑞穂集落では第二次帯戦後に樺太から無縁故引揚者としてやってきた人々が作った集落でこの地域にとってはいわば「よそもの」であった。瑞穂集落の人々は樺太での農業経験を基盤にして、入植当初から畑作を重視し農作物を売って生計を立てる暮らしをめざした。そのためこの地域の厳しい自然環境に適し、かつ価格の高い作物を模索して試行錯誤した。さらに周辺集落の人々が限られた耕地の中で低温の害を受けながらも稲作を続けていたのに対して、瑞穂の人々は当時周辺集落の人々が行っていなかった出稼ぎを行い、その収入を耕地の借入や購入にあて耕地面積の拡大をした。

その一方で瑞穂の人々の中には入植から離農法まででこの暮らしに見切りをつけて離村する世帯があり、入植時には16戸であった世帯が7戸にまで減少した。しかしこのことによってこの地域の農業で生計をたてるという決断をした世帯だけが残ったと考えられる。彼らは耕地面積を拡大するという傾向は共有していたが、それぞれが適作もとめて個別の試行錯誤を続け、その中で見いだされたのがトウモロコシであった。この地域の自然条件は、低温と積雪のため米にもリンゴにも不適といわれたが、トウモロコシは糖度が高く質の良いものができるので最適の環境であった。また他の畑作物と比較して価格も高いので1970年までに瑞穂の全戸が栽培を始めるようになる。

しかしこの時点では生産量が少なく、米とリンゴを重視していた農協はトウモロコシを扱わなかった。そのため瑞穂の人々は自ら販路を開拓し小規模な販売を行った。この地域が一大産地になるのは、枯木平と嶽農場に住む農家の参入を待たねばならなかったのである。枯木平、嶽農場にトウモロコシ栽培が広がるのは、減反や酪農の低迷で農業を続けるならもっと利益が上がり安定した作物を栽培しなければならなくなった1971年以降である。そのとき、すでにトウモロコシを見出し栽培拡大していた瑞穂のやり方がモデルとなった。

2集落で栽培が開始された結果、販路拡大が必須の問題となり、個々の農家は販路確保のため個別の努力を重ねる。その中で枯木平、嶽農場の数戸の農家が市場出荷実績をもとに農協と交渉し、その結果この地域すべてのトウモロコシ栽培農家に農協を通じた販路が開け、トウモロコシの栽培・出荷が安定

した。また同時期に町役場によってすすめられた観光政策とも連動して、嶽温泉と嶽キミがセットになって認知されるようになり、嶽キミはトウモロコシを栽培していない集落も含んだ常盤野の地域シンボルとして地域内外の人々に認識されるようになった。

産地化が可能になった背景には、開拓集落であるがゆえに集落内の社会的紐帯が緩やかであったこと、また個々の農家の試行錯誤によって生み出された結果へ人々が同調したことを考えることができる。そのような過程を経て、「よそもの」であった瑞穂集落の人々は他の集落の人々に認められ、この地域の住民として社会的位置を確保した。

常盤野が嶽キミの産地として形成されてきた過程でもっとも重要なことは、稲作・リンゴ栽培の不適地(だから開拓が入り、貧しい暮らししかできない)という地域への否定的な認識が、嶽キミの出現によって正反対に転換したことである。「こんなところで」ではなく「ここだからこそ」という認知が常盤野に住む人々だけでなく嶽キミを通して外の人々に広がり、また嶽キミに常盤野のトウモロコシ生産者のライフスタイルまでもが投影される。[トウモロコシは嶽産に限る]という外部の評判が、そこに生活しトウモロコシを生産する「私たち」の自信を再生産し、自分たちの誇りを正当化する根拠を与えてくれている。産地化は、外部との相互関係のなかでこの地域の特性を見だし、ここに住むことの意味を意識化する大きな契機になっているといえる。

## パプアニューギニア島嶼部住民における土地所有と生業適応

安高 雄治

(東京大学・人類生態学教室)

### 1. はじめに

パプアニューギニア・マヌス州のバルアン島に住む人々は、ヤムやキャッサバなどの焼畑農耕と主に珊瑚礁域での漁撈を営んでいる。外部社会との接触は比較的早く、ココヤシなどの換金作物の導入にともないコブラ作りなどの経済活動が見られる。また、現金経済が広く浸透しており、定期的に関われる市場(島内)での作物の売買も現金を介して行われている。住民が摂取する食物では、農耕および漁撈から得られる食料に加えて、現金によって購入した食品の消費が一般的になりつつある。

バルアン島では、近年の人口増加により土地不足

が見られるが、持続的な焼畑農耕を行う上で土地不足は住民の生活に大きな影響を及ぼす。ここではバルアン島住民を対象に、人口が増加し、利用可能な一人当たりの土地面積が縮小する中で、住民がどのように生活の上で対応しているのかを、行動時間調査・現金収支に関する聞き取り調査・食物摂取量調査などの結果をもとに検討した。

### 2. 対象地および対象集団

バルアン島は、パプアニューギニア・マヌス州の州都ロレンガウ南方海洋上約 60km に位置し、移動にはエンジン付きの小型ボートで 3 ~ 4 時間を要する。

バルアン島には 6 つの村があり、その中からペレリク村を対象として選んだ。ペレリク村の調査時人口は、26 世帯 105 人であった。このうち、集落から離れた所に居住している 4 世帯 14 人はこの研究の対象から除外した。対象集団は、4 つのリネージから成り、それぞれのリネージは 1 ~ 3 つのサブリネージ(以下、SL)から構成され、各 SL は 1 ~ 10 世帯から構成されている。また、SL は土地所有の単位でもある。

ペレリク村では、村内で土地に余裕のある世帯は少なく、多くの世帯が不足した土地を補うために他村の親類などから土地を借りて耕作している。このような土地不足の状況下、土地の所有権をめぐる問題が数多く発生している。

ところで、市場での作物販売は特殊な場合を除き、島内で行われることが多い。これは、ロレンガウへの往復に小型ボートを用いると燃料費だけで US\$ 70 ~ 90 必要であり、採算に合わないためである。

### 3. 方法

焼畑農耕と漁撈、主要な現金獲得手段であるコブラ作り、市場(島内)で食物販売に費やした時間を、14 才以上の男女 53 人を対象に、2 週間にわたり直接観察および聞き取りにより確認し記録した。現金収支に関しては、世帯員全員に対し毎日一回、2 週間聞き取り調査を行った。また、秤量による食物摂取量調査を 6 世帯で行った。

対象集団は、土地所有と生業との関係を見るために、土地の所有単位である 9 つのサブリネージを、  
 : 他の SL に土地を貸す余裕があったグループ、  
 : 世帯が所有する土地に加えて他 SL から土地を借りていたグループ、 : 畑をすべて借りていたグループ、という 3 つのグループに分類した。土地不足と生計活動の間に、グループ間でどのような差



があるのかを検討した。

#### 4. まとめ

焼畑農耕は全世帯で、また漁撈は働き盛りの成人男女のいる世帯では必ず行われていた。これら以外の活動としては、グループでは市場（島内）での食物販売がほとんどの世帯で行われていたが、

グループでは5世帯の内わずか1世帯で行われていたのみであった。コブラ作り・カカオ作り・トレードストア経営などの活動においてもグループではその占める割合が低く、その反対にグループでは高く、グループではその中間という傾向があった。

焼畑農耕に費やされた時間を見ると、グループが多く、グループが最も少なく、グループは中間に位置した。ところが、漁撈ではグループが短く、グループにおいて長い時間が投入されていた。またコブラ作りではグループで投入時間が短い、グループでは長かった。土地不足が深刻な世帯ほど農耕に振り分ける時間が減少し、現金獲得活動を行う世帯が多いという傾向が見られた。

現金収支においては、収入・支出ともにグループで大きく、グループでは小さく、グループはその中間であった。市場（島内）での食物販売やコブラ作りなどの収入でも同様の傾向が見られた。また支出面では、米や魚の缶詰などの購入食品に支出した金額は3グループの間で大きな違いは見られなかったが、グループにおいてのみタロやヤムなど現地で栽培された食物に対する支出が多かった。食物摂取量調査の結果からは、現金経済の浸透によって購入食品の消費が一般的になっているにもかかわらず、平均すると全摂取エネルギーの約2割を購入食品に依存しているに過ぎないことが明らかとなった。タンパク質においても3割を越えていなかった。このようにグループにおいて、農耕に投入する労働力の一部を換金作物に投入し、他のグループと同程度の購入食品を消費しながら、食物の不足分を島で栽培された作物を購入することで調達していたことは興味深い結果である。

これらのことから、人口増加に伴った土地不足は、それが深刻であるほど焼畑農耕に依存する割合は減少する傾向が見られた。漁撈においてはこの傾向が見られなかったが、これは漁撈が土地には依存しないためであると考えられた。また、購入食品の消費割合に特定の傾向は見られず、現金収入が増えてもそれが購入食品の消費にすぐに結びつくわけではないと考えられた。

## バカ・ピグミーの「歌と踊り」の場における「集まり」の構成

分藤 大翼

（京都大学大学院人間・環境学研究所  
アフリカ地域研究専攻）

本研究の目的は、バカ社会における「歌と踊り」の重要性を、「歌と踊り」の場における「集まり」の構成の分析を通じて明らかにすることにある。

まず初めに、ピグミーの「歌と踊り」に関する先行研究を概観しておく、それらは以下の3つに大別することができる。まず、宗教と遊びとの関係など、「歌と踊り」の社会的な側面に注目した研究。次に、彼らの「歌」を音声的パフォーマンスとして研究したものや、民族音楽学的な研究を行ったもの。そして近年、バカ・ピグミーについて行われている、集落間における精霊儀礼の比較研究などが挙げられる。これらの先行研究によって、「歌と踊り」の幾つかの側面は明らかにされてきているが、一つの集落において「歌と踊り」がどのように構成され、行われているのかという点については、まだ十分な研究が行われていない。そこで本論では、一つの集落において108日の間に60回（晩）行われた計18種類の「歌と踊り」を対象に分析を行う。（この「歌と踊り」はバカ語ではbe（ベ）と呼ばれる。以下beと記述する。）

通常beは、日が落ちて暗くなった後に、集落内の広場で行われる。そしてそれはまず、少年たちによって叩かれる太鼓の音と共に始まり、その音を聞きつけて参加者が徐々に集まり、女性たちが歌い始めると、本格的にbeが始まる。

このbeは「精霊」のパフォーマンスが行われるものと、行われないものの2つのカテゴリーに分けることができ、以下にみるようにそれらは対照的な性質を持っている。（ここで言う「精霊」とは、バカ語でme（メ）と呼ばれるもので、人間的な要素を含み持つような霊的存在として認識されていると推察されるものである。）このmeのパフォーマンスというものは、多くの場合、一人の踊り手によって行われ、踊り手はmeの種類によって決まった扮装をし、個性のあるパフォーマンスを披露して見るものを楽しませる。そして、その扮装は、女性に対して踊り手の匿名性を守る役割も果たしている。このカテゴリーの特徴としては、meの種類によって、そのmeを守護しているとされる特定の成人男性がおり、その



男性が主催者として be の開催、進行の指揮を執る。また、参加者には既婚者が多く、特に成人男性が参加するのが顕著な特徴である。男性は be が始まるまでの間、家の裏など女性たちに見えないところで、踊り手が衣装を着けるのを手伝い、be が始まると、太鼓を叩いたり、踊り手を囲んで囃し立てるなどして、パフォーマンスが円滑に進行するように演出を行う。このように、me のパフォーマンスが行われる be においては、歌を担当する女性と、太鼓や踊りを受け持ち、be 全体の演出を行う男性というように、性による役割の区分が明確になっている。

さらに、このカテゴリーに分類した 8 種類の be を個別に見ることによって明らかになる点をまとめると、me の種類によって男性の be への関わり方に世代による違いがあり、少年、青年、壮年のそれぞれが中心となって行うものや、それらの世代を越えた協同によって行われる be があることが分かった。そしてその一方で、女性が歌い手として、またパフォーマンスの受容者として、その役回りを引き受けることによって場が成り立っていることが分かった。

一方、me のパフォーマンスが行われない be では、特定の踊り手は登場せず、参加者が各々に歌い手となり踊り手となる。また、どの be を行うかは、そこに集まったメンバーの好みに応じて決められ、性別に関わらず、その場にいる年長者が be をリードする。また、参加者数は me のパフォーマンスが行われる be に比べると平均して半数ほどであり、その割合は、若い成人女性から子供が多いのに対して、成人男性が参加することは稀であった。このように、me のパフォーマンスが行われない be は、be の場における性と世代による役割の区分は緩やかなものになっており、女性や子供が自由に歌って踊れるという遊戯的な特徴を持っている。

さらに、このカテゴリーに分類した 9 種類の be を個別に見てみると、その中には、子供たちが男女の性的な関係や、me のパフォーマンスを模倣するものがあり、また成人女性や青年女子が中心となって、農耕民や、教会において行われる「歌と踊り」を取り込んでバカの集落において行うものなどがある。また、男子の割礼儀礼の際に、女性によって行われる「歌と踊り」が、通常の be として行われることもある。これらのことから、me のパフォーマンスが行われない be には、様々な状況が柔軟に取り込まれており、主に女性や子供の娯楽として行われているということが明らかになった。

このように、バカ・ピグミーの「歌と踊り」は、その種類によって「性」と「世代」による文節に様

々なバリエーションがあり、参加することを通じて社会的な性や世代への自覚が促され、バカとしてのアイデンティティを体得してゆく場ともなっていることが分かる。また、その参加も強要されるものではなく、あくまでも個人の意思に委ねられていることから、be という場が個人的な楽しみと、集合的行為のルールが相互に作用することによって形成されているということが分かる。

本研究において、be における「集まり」の構成を分析することによって、「歌と踊り」の場においてバカ社会の社会関係が様々に具現化されていることが明らかになった。そして、バカは幼少の頃から be に参加することを通じて、社会の成員としてのアイデンティティを体得してゆくということが推察された。そしてこのような性質から、be という場はバカ・ピグミーの社会において、重要な存在意義を持っていると考えられるのである。

## 自然保護区周辺住民の生計戦略

### ～タンザニア・セレンゲティ国立公園に隣接するロバンダ村の事例～

岩井 雪乃

(京都大学大学院人間・環境学研究所  
アフリカ地域研究専攻)

#### 1. はじめに

自然保護の分野では、1980 年代に入ってから、居住している住民を無視して自然保護区を設置するといった中央集権的な自然保護が反省されるようになった。アフリカでは、切りはなされた住民と保護区との関係を改善するために、「自然保護と住民生活の向上」をめざしたプロジェクトが各地で試みられている。本研究で対象としているセレンゲティ国立公園においても、93 年からプロジェクトが始まっている。この発表では、セレンゲティ国立公園に隣接するロバンダ村において、基本データというべき住民の生計維持機構を明らかにし、プロジェクトを含めた国立公園の存在全体が住民の生計戦略に及ぼす影響を、住民の側から分析した結果を報告する。

#### 2. 世帯の生計戦略

ロバンダ村の生業は、農業、牧畜、現在は違法となっている狩猟、そしてその他の現金稼得活動の組み合わせであった。農業では、主食となるソルガム

とフィンガーマレットを耕作していた。収穫量を調べてみると、一年間主食を自給するのに十分な収穫をあげていたのは16%の世帯のみであった。牧畜では、牛、ヤギ、ヒツジが飼養されており、主食が足りなくなった時には売却されて主食の購入にあてられていた。家畜の売却状況を調べたところ、家畜を飼養している世帯の4割が売却していなかった。これは、牛耕のための労働力や、婚資として価値のある家畜はなるべく手放さず、ほかの収入源で主食を購入していると考えられる。世帯主の性別で比較すると、女性世帯は収穫量、家畜飼養数ともに男性世帯よりも低く、女性世帯の生計には農業と牧畜の重要性が低いことがわかった。

狩猟は、国立公園が設立される以前からおこなわれてきた伝統的な生業であるが、現在ではライセンスと銃を必要とするため、村人がおこなうワイヤーによる猟は違法行為となっている。しかし、依然として村人の狩猟は続いているため、公園管理局との間に対立を生んでいる。今回は、食事の副食に利用される野生動物の頻度から狩猟の状況を推察した。その結果、副食の10%が違法な狩猟による野生動物となっていた。野生植物の利用頻度が大きいこととあわせて、人びとは副食を自然資源に依存していることがわかった。

現金稼得活動は、収入源別に3つのタイプに分類できた。(1)国立公園タイプ---国立公園関係の機関から直接収入を得る。公園内のホテルの増加という観光業の進展の影響を受けて生まれてきた仕事で、収入が高額だが、短期で不定期。(2)混合タイプ---公園関係者と村内の人びと双方から利用される。公園管理局の移転によって、村外者の往来が盛んになって発達。(3)村内タイプ---村外からの需要はなく、村内の人びとが利用する。上記ふたつのタイプの経済活動が活発になるにつれて、相互扶助でおこなわれていた作業が商業化している。

女性世帯と男性世帯の比較では、国立公園タイプに従事しているのは男性世帯が多く、一見、国立公園が存在する恩恵を受けるのは男性世帯だけのようにみえる。しかし、女性世帯は、村内タイプの仕事を活性化させることによって、間接的に国立公園から収入を得ていた。

以上から、女性世帯は村内タイプを活性化させる戦略、男性世帯は農業、牧畜、現金稼得活動を複合させる戦略をとっているといえよう。

### 3. 生計戦略と国立公園の関係

野生動物をめぐる、農作物被害と密猟という問

題があった。現金稼得活動の面では、国立公園タイプと混合タイプには公園から直接的な収入があり、それが間接的には村内タイプに環流していた。住民対策としておこなわれているプロジェクトは、給水ポンプの修理、製粉機の購入、小学校の増築など住民全体の福祉向上に大きく貢献していたが、個々の世帯の生計戦略にとっては重要ではなかった。

### 4. まとめ

ロバング村は、野生動物が豊富な環境であるために、国立公園の設立、狩猟の禁止、住民を無視した自然保護の反省にもとづいたプロジェクトの開始など、国際的な環境保全の流れを受けた政策が次々と実施されてきた。また、先進国からの旅行者の増加によってタンザニアの観光業が進展し、それがロバング村へも影響して現金稼得活動の機会を増大させた。人びとは、このような社会環境の変化によって生じた多様な機会を、逃さずとらえて対応しているといえるだろう。

また、プロジェクトが継続していく、あるいは新規のプロジェクトをおこなう上で、女性世帯と男性世帯の差異には留意すべきであろう。男性世帯は国立公園から直接的な利益を得やすい立場にあり、女性世帯は間接的な利益を得る手段を持っている。このようなジェンダーによる差異に考慮して、受益者が偏らないようにプロジェクトを計画してゆく必要があるといえる。

## 台湾パイワンのイノシシ (*Sus scrofa*) 猟

野林 厚志  
(国立民族学博物館)

### 1. 研究の目的

本研究では考古学資料のなかでもとりわけその情報量が多い哺乳動物の下顎骨に注目し、考古学者がこれらの資料を分析し、その結果を解釈する上での指針となる民族考古学的モデルの構築を第一の狙いとした。遺跡から出土される動物遺存体のなかでも、上顎骨と下顎骨がもつ情報的価値は高い。それはこれらの骨が歯を伴うからである。歯からは様々な情報が得られる。例えば、歯のサイズは種ごとに安定しているため、人骨や動物骨を集団や種ごとに比較するのに有効である。また、歯からはその個体の年齢が判別でき、個体群の年齢構成を推定することによって、当時の生業戦略、例えば、生業カレンダー、

狩猟方法、狩猟範囲などの問題を論じることができる。しかしながら、考古学資料を分析した結果を解釈するためのモデルは、当然のことながら考古学資料自体から得ることはできない。そこで、現在の民族例をもってこうしたモデル構築を試みるがおこなわれる。こうした方法論的な問題にとりくむ一つの研究分野が民族考古学である。民族考古学を文字どおり、ある「民族」の「考古学」ととらえる研究者も少なくないが、ここで定義する民族考古学とは「現代の行動の観察とそこから生じる物質的記録の分析を通し、考古学資料の生じた背景と資料の様々な属性との関係を研究する分野」である。換言すれば、民族考古学者の目的はモノに刻み込まれた人間の営みを読み取るための理論と方法とを確立することにある。

## 2. 理論と方法

動物の年齢を推定するのに最も有効な方法は、個体の歯の状態を調べることである。一般に、哺乳動物は乳歯が崩出、摩耗、抜け落ちたあとに永久歯が崩出、摩耗し、抜け落ちるというプロセスをたどる。それぞれの歯がどれくらいの時期に崩出するかは個体年齢とほぼ相関しており、歯の崩出状況がわかれば、その個体の年齢はある程度の幅を持ちながら推定可能となる。また、すべての歯が崩出したあとの永久歯の摩耗の度合いを比較すれば、各個体の相対的な年齢を推測することができる。最近では、歯の組織の一部であるセメント質に形成される年輪をもとに個体の年齢を推測する方法などについて研究が進められている。

本研究ではまず摩耗の状態によって各個体の相対年齢をわりだし、補各個体群全体の出現頻度の概要をつかむことにした。イノシシの歯の摩耗については Grant が基準となる咬耗指数を公表している。本研究において用いた資料は台湾原住民族の一集団であるパイワン族が所持しているイノシシの下顎骨である。資料は一人の男性によって捕獲された個体由来する。狩猟方法はくり罠およびとら罠（はさみ罠）で狩猟期間は約 30 年間、資料数は 158 個である。パイワン族をはじめとする台湾原住民族の各集団は捕獲した動物の下顎骨を家の軒先に吊り下げるという習慣を有しており、資料を提供してくれた男性もこの習慣にしたがい、自分の捕獲したイノシシの下顎骨をすべて自宅の軒先に吊り下げていた。これら下顎骨について Grant の咬耗指数をもとに M.W.S.を算出し、相対年齢ごとの個数を調べた。

## 3. 結果と考察

図 1 は M.W.S.ごとの個体数をヒストグラムで示したものである。いくつか存在するピークを中心にグラフの形状を解釈した場合、ピーク自体は連続的に減少していることから、ある年齢群においてイノシシの個体群が急速に捕獲される（もしくは個体数の減少が生じる）ということはないと考えられる。ここで興味深いのは捕獲個体数が極大値をとった後に、しばらく個体数が減少する時期があり、こうした現象が周期的に生じていることである。これにはパイワン族の生業カレンダーが深く関与していることが考えられる。パイワン族はアワとサトイモを中心とした焼畑農耕を伝統的に行なっており、農繁期となる春先から秋ぐちまではそれ以外の季節と比べて、猟場を見回る頻度が半分以下になるということである。つまり、このグラフに現れている捕獲個体数の減少期は狩猟活動が他の生業活動との組み合わせのなかで低下している時期にあたりと解釈できる。通常、こうしたピークと減少期を交互に繰り返すパターンを示した場合、居住地の移動が行なわれていたという解釈が行なわれる場合が少なくない。これに対して、本研究咬耗は、定住生活をおこなう農耕民の狩猟活動においても季節的な変動パターンが考古学資料に生じるということを実証的にしめすものである。

## 4. 今後の展望

ここでは M.W.S.の結果にのみもとづき議論を行なった。先に述べた定住性農耕民の狩猟活動に関連したモデルの妥当性はピークとそれにつづく減少期における補各個体の月齢を考慮することによって検証される必要がある。これには歯の崩出状況を各個体について観察した結果から考察することによって、議論を行なうことが可能となる。

### 参考文献

- Grant, A.  
1982 The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates. In *Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites*. B. Wilson, C. Grigson, and S. Payne, eds. pp. 55-71. BAR British Series 109. Oxford: British Archaeological Reports.

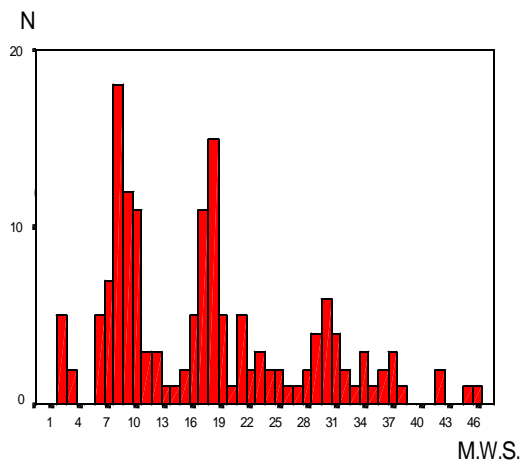


図1 イノシシの相対年齢ごとの捕獲個体数

## クジラとのかかわり方：太地にみる小型鯨類の利用

林 耕次

(神戸学院大学人間文化学研究科)

本発表では、和歌山県太地町でおこなわれている小型鯨類の「追い込み漁」を通じて、鯨類とのかかわりについて考察する。ここでは太地の歴史的背景を概観したうえで、生業としての追い込み漁を、漁の組織や技術、小型鯨類の生態に関する民俗知識、および経済的側面について考察する。

生業としての性格を併せもつ、太地でおこなわれている鯨類の捕獲形態は、小型沿岸捕鯨、追い込み漁、突き獲り漁（突きん棒漁）である。いずれも規模は小さいが、大規模な近代捕鯨漁が興る以前から伝統的に存続してきた。

ここで追い込み漁をとらえる意図は、次のようなものである。太地における追い込み漁は、地域内部での資源利用をはじめ、独自に発展していった技術や多様な食肉利用など、伝統産業としての性格を併せもつ。だが一方で、流通システムを通じて太地以外の地域にも出荷され、より広範な地域を含めた市場経済にも対応している。これらの相互作用を経て、捕獲鯨類の変化や、生存利用といった新たな利用が追い込み漁によっておこなわれていることは注目される。それは、国際捕鯨委員会（IWC）の決定にみられるような、商業捕鯨と生存捕鯨という二項対立的な図式には還元しきれない側面であるといえる。

太地町は和歌山県南東部の小さな半島部に位置する小さな町である。平地に限られるので、農業には通さない土地である。しかし、黒潮をのぞむ条件に

より、沿岸と沖合いでの漁業は盛んにおこなわれ、太地の人々は古くから海の恵みを受けてきた。鯨類の捕獲はおよそ八百年前にさかのぼることができるが、捕鯨方法は時代ごとに独自の発展をとげてきた。第二次世界対戦以降は、鯨肉の需要の高まりのなかで遠洋捕鯨の船員として、優れた捕鯨技術を持つ太地出身者が多くたずさわりの、新たな鯨文化が育った。大規模な近代捕鯨業は1960年代をピークに、巨大産業に発展したが、70年代からは徐々に衰退し、1986年にはIWCによる商業捕鯨禁止の影響を全面的に受けることになった。

こうした状況で、捕食文化とのつながりが深い地域に残る小規模な、沿岸型鯨類の捕獲（IWC 管轄外だが、国や各道県の管理下にある）は、各地の鯨および捕鯨文化の存続とともに、全国的な需要の供給を担う産業として、注目を浴びることになった。

追い込み漁は、組織的で統制のとれた操業と、経験に裏づけられた自然条件の把握や、鯨類の習性に対する知識に依拠して、探索、発見、捕獲、解体に至るまでの作業が進められている。なお、小型鯨類の捕獲は、太地内の生業活動として、地元の食習慣を支える一方で、地域外の鯨肉の需要にも対応している。6種類の捕獲鯨類（表参照）のうち、コピレゴンドウとスジイルカは、昔から太地で好まれていた（漁師が肉の分配をするのも主にこの鯨種である）。注目されるのは、他の4種が以前より盛んに捕獲されるようになったことである。これらの肉の多くは、加工用として太地の外部に供給されるほか、バンドウイルカとオキゴンドウは、生存利用（水族館での飼育や研究用など）としても供給されるようになった。これは、生きたままで湾に追い込むという技術の結果といえよう。

昔から太地のみならず、捕鯨で栄えた地域では、「鯨一頭、七浦をうるおす」と言われてきた。現在では、流通システムの発展によって鯨肉の消費地域は拡大し、捕獲禁止となった大型鯨類の代わりに小型鯨類が消費の対象となった。思うに、鯨類 -- [鯨一頭] の供給における太地の役割は、自分の地域のみならず他の地域 -- [七浦] にも何らかの経済効果をもたらす点において、昔とかわらないと言えよう。

近年、自然保護や動物愛護の風潮をうけて、鯨類捕獲は批判を受けることが多いことも事実である。それまで鯨類は、食用や地域の文化的なつながりのなかで認識されていたが、鯨類の生態研究がすすむにつれて、鯨類そのものに対する関心が広くもたれるようにもなった。鯨類とのかかわり方、その側面としての「利用」についても、人びとの意識が変化

するようになった。

外部とのかかわりや世論のなかで、太地はいかにして捕鯨の伝統を維持してゆくのか。また、現在定められている漁期、鯨種、捕獲枠、操業方法などの規約を含めて、今後どのように変わってゆくのか。小型鯨類の追い込み漁をとりまく今日の状況は、多くの困難な課題をかかえていると言わなければならない。だが、歴史的な経過や経済的相互作用のなかで、鯨類に対する変化に対応し、新たな利用を模索していることも事実であろう。

和名	学名	年間捕獲枠	生存利用
コビレゴンドウ	<i>Globicephala macrorhynchus</i>	300頭	
ハナゴンドウ	<i>Grampus griseus</i>	300頭	
オキゴンドウ	<i>Pseudorca crassidens</i>	40頭	
スジイルカ	<i>Stenella coeruleoalba</i>	450頭	×
バンドウイルカ	<i>Trusiops gilli</i>	890頭	
マダライルカ	<i>Stenella attenuata</i>	400頭	×

\*例外として、シャチ (*Orcinus orca*) の捕獲

## 移動するムラ：コンゴ北部、森林バントウの集団編成

埴 狼星

(京都大学大学院理学研究科)

はじめに

コンゴ北部に住むバントウ系民族は、植民地化と独立を経て近代の中央集権的な政治体制へと編入されてきたが、熱帯雨林と広大な湿地帯という自然の障壁に守られ、バントウ固有の社会＝文化的特質を今なお色濃く残している。この地域の集団編成の特質としては、(1) エスニック・グループの境界設定の困難さ、(2) 集団およびその構成員の移動性の高さがあげられる。このような集団の「柔軟性」や「可塑性」は、Fortes & Evans-Prichard (1940) の「リネ

ージ理論」では説明がつかない。これに対して、Vansina (1990) は、熱帯雨林に居住するバントウ系民族の制度を歴史言語学的に分析し、これらの集団の基本的な社会単位として「ハウス(イエ)」という概念を提示している。ハウスは、世帯、家、村などの重層的な内包をもつ民俗概念である。本論では、ハウスという概念を手がかりとして、コンゴ北部のエスニック・グループの集団編成の原理とダイナミクスを分析する。

### 対象と方法

調査は、1991年から92年、96年から97年の二度、コンゴ共和国北部リクアラ州のモタバ川中流域のジュベ村に居住する「ボバンダ」と近隣集団を対象に行った。モタバ川中・下流域の村落は、20世紀初頭に植民地政府が周囲の森林内に分散して居住していた小規模集団を、強制的に集住化させてつくった行政村である。現在、言語学的な近縁性にもかかわらず、この地域の人びとを包括するような帰属集団はみられず、集団名と帰属意識を共有するエスニック・グループと呼ぶ集団は、一村から二村を単位とする小規模な集団である。一方、ジュベ村より上流域に住む農耕民カカ、森林部に居住する狩猟採集民アカと、ボバンダを含む中・下流域の集団との間に顕著なエスニック・バウンダリーが認められた。

### 結果

#### (1) ボバンダの基本的社会単位、ディカンダ

ボバンダ社会には、「ンダコ ndako」(世帯、家)、「ンボカ mboka」(村、ムラ)、「モラコ mo.lako」(漁撈キャンプ)という居住集団と、「ディカンダ di.kanda」と呼ばれる祖先中心的な父系出自集団、「ボアモト boamoto」と呼ばれる姻族、「ディニャング di.nyangu」と呼ばれるエゴ中心的な共系親族がみられた。ディカンダは、外婚単位、政治的単位、生産・消費の単位であり、ボバンダ(ジュベ村)は11のディカンダから成っている。

この地域の社会集団の名前を検討したところ、ディカンダ名と集住化以前の小規模な居住集団ムラの名前は同一で、出自集団と居住集団を重複させる命名法は、現在のモタバ川中・下流域の集団と行政村を同一の名前で呼ぶ命名法に一致していることがわかった。ディカンダの「イエ、ムラ、クラン」という語源的な意味(Guthrie, 1971)を併せて考えると、ディカンダは、出自集団であるとともにムラ＝イエという居住集団でもあるといえる。言い換えると、

ボバングの基本的な社会単位は、父系原理と共系原理を併存させる共住集団ディカンダである。

#### (2) ディカンダと近隣集団との擬制的親族関係

ボバングの11のディカンダについて、婚姻を除く近隣集団との関係を調べたところ、ボバングは、近隣集団の戦争捕虜に対する被保護者関係、狩猟採集民アカとの擬制的親子関係、アカとの名付け親関係、近隣集団カカとの擬制的兄弟関係という4種の父系的な擬制的親族関係を結んでいることがわかった。擬制的親族関係は、通婚関係をもたない近隣集団との対立を回避しローカル・ネットワークを形成する機能をもっている。

#### (3) ボバングにおけるディカンダの形成過程

ボバングのディカンダに関する聞き取りから、それぞれのディカンダの系譜関係や起源に関する伝承が発達していないこと、ディカンダは高い分裂性と移動性をもつこと、ディカンダ同士の関係は戦闘から婚姻関係・擬制的親族関係を介した連合へと移行することがわかった。また、現在のジュベ村では、国家による法的な拘束のもと、成員の移出入が抑制されているものの、ディカンダからの世帯の分裂が頻繁に行われていた。

#### (4) 地域社会におけるディカンダの形成過程

モタバ川中・下流域のエスニック・グループの歴史に関する聞き取りから、ボバングにみられたディカンダの分裂と移動の過程は、この地域全体に共通することがわかった。さらに、村とキャンプの分布に関する聞き取りから、分裂と移動の過程は現在も進行中であることがわかった。

#### 討論

この地域の基本的な社会単位は、共住集団としてのディカンダであり、ディカンダは、父系原理と共系(母系)原理の併存により集団を維持している。ディカンダを中心とする集団編成の原理は、民俗遺伝学的、祖先中心的な系譜関係よりも、民俗社会学的、擬制的、エゴ中心的な系譜関係の確立に重点をおいたものである。このような実践的で柔軟性に富んだ集団編成の原理により、集団の分裂と移動から新しい集団とローカル・ネットワークの形成が可能になっているものと考えられる。

#### 参考文献

- Fortres, M. & E. E. Evans-Prichard, 1940. African Political Systems.  
Guthrie, M., 1971. Comparative Bantu: An Introduction to the Comparative Linguistics and

Prehistory of the Bantu Languages 2.

Vansina, J., 1990. Paths in the Rainforests.

(以上の報告は、1998年3月22日～23日に伊香保温泉・横手館で開催された第3回研究大会の発表要旨[和文]を再録したものである。掲載は大会での発表順にしたがった。なお、所属は発表当時のものである。)

#### 編集後記

たいへん遅れて申し訳ありませんでしたが、ようやく今年度のニュース・レターをお届けします。

第4回の研究大会を富山県立山で開催いたします。会場は2日目午後まで貸し切りです。夜は、会場にちなんで清酒立山もご用意します。おいに(しかし多少の節度は守って)ご歓談ください。会場の近くには、称名の滝や広大な庭園を持つ立山博物館があります。大会の後、酔気を初春の立山散策でお醒ましくください(竹内)。

生態人類学会ニュースレター No.4

1999年1月15日発行

編集: 竹内 潔

1998年度事務局

〒930-8555 富山市五福3190

富山大学人文学部文化人類学研究室

Tel/Fax: 0764-45-6186

E-mail: anthro@hmt.toyama-u.ac.jp

印刷: 土倉事務所

〒603-8148 京都市北区小山西花池町